

富山市総合計画審議会「第2回 活力・交流部会」 議事録

日時：令和3年9月30日（木）13:30～15:00

場所：富山市役所 議会棟第3委員会室

出席者：(順不同)

長尾 治明 富山国際大学名誉教授（部会長）
石田 康博 日本労働組合総連合会富山県連合会富山地域協議会議長
四宮 敏雄 公募委員
中井 義則 八尾地域自治振興連合会会長
星川 圭介 富山県立大学 工学部 環境・社会基盤工学科教授
道井 秀樹 とやま市漁業協同組合 代表理事組合長
森田 由樹子 株式会社エコロの森代表取締役

企画管理部 前田部長、森次長、刑部参事、山口企画調整課主幹、堀企画調整課主幹、
屋敷企画調整課主任、村中企画調整課主任
商工労働部 梅沢次長、竹井次長
農林水産部 山口部長
活力都市創造部 中村部長
教育委員会 高橋生涯学習課長

議事内容：

1. 開会
2. 第2次富山市総合計画後期基本計画（案）についての意見と対応
事務局から第1回部会での意見に対する対応案について説明。

委員

- ・ この部会の範囲を超えてくるだろうし、富山市だけの問題ではないので、なかなか難しい問題と承知しているが先進的なまちづくりをされているということで期待もあって申し上げたい。やはりこの商店街の役割というのが今一つ整理しきれていないのかなという印象を受けている。商店街は儲かるところにできる。儲かるところに集まり自分たちがやってきたということがあるが、それがいつしか公益性を持ってきて、今は公益性が重視されるようになってきて、前面に出ているところもある。

3ページ目のⅢ-1-(1)に記載されているように財政的な支援はするけど、自分たちで頑張ってもらいたいとなっている。商店街は今後5年ぐらいで大きく変わると思う。商店街の活性化を頑張っているのは70代くらいの方がほとんどで、若い人が出てこない。だから商店街はもっと儲かるようにすべきだし、駅前など他のところに集まるのは当たり前。それに対して地域の中核になってと言われて、地域貢献を求められる。整理がしきれていない印象である。商店は営利の主体であることに立ち返って、その

営利の主体が成り立っていくために、総合計画というのを立てていくのがすっきりするのではないかなと思う。

部会長

- ・ 自主的な経営を、当事者がしっかり考えて、行政の立場からすれば、支援的なメニューとか、そういうものをもっと充実強化したほうがいいということか。

委員

- ・ 基本私企業なので自分たちで儲かるようにしていくべきとは思いますが、例えばコロナの時にここを乗り切れば、商店街がまた良くなって、地域の核として商業的にまたやっていますよという支援の仕方はあるのだと思う。若しくは、永続的に公益事業だからみたいな形で支援していくのか、はっきり位置付けた方がいいと思う。

部会長

- ・ 私企業であるというのは基本にあると思うが、このコロナの影響で、経営がさらに苦しい環境下にある事業体に対してはどのような支援をいつまでやるとか、そういう手助けの部分のことか。

委員

- ・ 今の団塊の世代がこうなっているから、ここを抜ければ儲かるはずだから今支援すればいいといったビジョンを持つことが大事ではないか。

部会長

- ・ 魅力ある商業空間の「魅力ある」とは便利な言葉で、商店街の中にどんな空間を作っていけばいいのかというのは、たぶん当事者が一番わかっていないのではないかな。やはり魅力というのも時代の流れとともにかなり内容が変わってきている。

今までは高度経済成長期において、商店街は物販が中心で、売れ筋とか、普段手に入らない商品が揃うとか、そういうような機能で消費者からも支持されていた。これからの方向性として、商店街においても、物を売るということではなくて、生活の支援とか、生活相談ができるような、サービス業に変化していくことが必要ではないかなと思う。

これからの商店街は、生活空間を充実させていくとか、暮らしにおいていろんな悩みなどを持っておられる人もいますので、そういう人の拠り所として、相談が商店街の身近なお店でできるという、そういうサービス機能的な部分をこれから魅力としてもっとPRしていくべきではないか。物販の充実というのは、大型店に任せて、商店街はもっと日常生活に近いサービスを考えていったほうがいい。生活支援に役立つお店として充実していくべきではないかと考えている。魅力あるという中に含まれてしまいかもしれないが。魅力あるというのが具体的に言えばこういうことですよというような、ちょっとヒントに繋がるような表現があるとよいのではないかな。

商店街が主体となった賑わいの創出もまさにこのとおりでと思うが、なかなか商店街の皆さんも今コロナ禍もあって賑わいの創出が難しいと思う。こういうふうにやれば儲かるという、やはりそういう

ヒントに繋がるようなことを、対応案の中に記載することを検討していただけないかと思う。

事務局

- ・ 商店街の衰退というのは富山市のみならず、日本全国の課題であり、いろんな自治体あるいは商店街がチャレンジしておられて、成功例もあれば、成功したかに見えても結局やっぱりなかなか上手く広がらないというようなことの繰り返しだと思う。委員からいろいろご指摘いただき、やはりこれは何といても商店街の店主の方が自ら品揃えなど、もう一度考えてもらいたい。行政としてはいろんな支援策を用意しているが、リアルな店舗での販売からオンラインでの販売へと変化している状況もある。しかし、やはり商店街というのは、地域にとっては大変必要な機能だと思っているので、そのために富山市ではできるだけ人が外に出てきてもらう、中心商店街に出てきてもらう、回遊性が生まれるような施策を打ち出してきている。路面電車の環状線化であるとか、南北接続であるとか、グランドプラザを作ってそこでいろんなイベントを開催している。冬はアイススケートなどいろんな企画を行っている。

ガラス美術館をまちなかに作るなど、中心市街地に投資をして、魅力ある公共投資で人を惹き付けようということをやっているのも、それをチャンスと捉えて、商店街の方が努力をしていただく必要があるだろうし、そのための支援策というのは、今後もやっていきたいと考えている。

商店街の活性化とか役割をどう整理したかというのは行政だけでは対応できない部分があるが、総合計画はまちづくりの方向性を示すものであるため、例えば商店街活性化計画とか中心市街地活性化計画という個別計画の中で、いろんな具体の施策や対応策を盛り込むことを検討していきたいと思っている。

部会長

- ・ 方向性や具体的に何をやればいいのかということも個別計画の中で示していただけると就業者自身も読んでためになる情報が見えてくるのではないかと思うので、難しい部分もあるかもしれないが、できる限りわかりやすくするために個別計画の内容を充実していただけるとありがたい。

委員

- ・ ご承知の通り商店街というのは、今まで、そこに行けば半日なり1日、家族ぐるみで遊べた。結局、小型のショッピングセンターと一緒に、すべてがそろっていた。1日遊べるような専門店が集まっている。それを時代に合わせて作り直して、行きやすい郊外型としたのがショッピングセンターであり、それによって衰退した商店街をまた1からやり直すというのはかなり無理があるが、市でもいろいろまちづくりに取り入れられて、立て直しを図られている。しかしながら、うまくいかなかったという受けとめで、地権者である商店街の人たちがそこまで魅力を感じないからだと理解をしている。そこには組織としてのグループを統括するリーダーが多分いないのだろうと思われる。うまくいっている商店街というのは理事長あたりにリーダーシップを持った人がいて、無理を言っても指導して、何かに特化した形で、上手くいくのだろうと認識している。なので、今言われているのは総曲輪通りや中央通りのことだと思うが、各校区にもそれなりの商店街が昔はあったと思うが、それもすべて衰退している。何かスペシャルなことに特化しないと、あれもこれもつまんで、もう一度賑わいを作ろうというのは無理だと思う。特化するようなものをプレゼンして、やり遂げられた方がいいかと思う。

ライフスタイルというのは、近年急速に変わりつつある。インターネット社会もそうだが、買い物をするだけであればネットで十分である。わざわざ足を運んでいくということは、そういった時間を買いたいということであり、イベントなどの催しを中心に、例えば、雑貨店では常にそこに行けば必ずいろんな雑貨がそろそろなど、スペシャルなことをずっと仕掛けていくことが必要である。興味のない人は全く行かないが、興味のある人は一定程度の人が行くと思う。そういった意味でもスペシャリティな施策をしてはどうか。

部会長

- ・ 今は競争社会なので、商店街の独自性、差別性とか、そういうものをきちっと打ち出して、お客さんに示していくことが必要ではないかというご意見だったと思う。
- ・ リーダーの不在というのは確かに大きい部分だが、得意なものが商店街の魅力に繋がるようなコンセプトやあるいは具体的な行動を商店街単位でもっと検討して、何かやって効果があがってくれば支持者も増えてくるのではないか。そのようなことも、何か個別計画の中で再度考えていただけたらありがたい。

委員

- ・ 市民に期待する役割に追記された「既存ストック」という文言が一般的な言葉なのかかわからないが、空き家店舗等の有効活用とシンプルにした方がいいのではないか。

事務局

- ・ 今あるものをいかに有効活用するかという観点で、既存ストックという言葉を使っている。中心商業地に空き店舗等があるのは大変大きな問題である。そこを更地にしてもう一度建てるのではなく、既存の空き店舗をそのまま内装だけ変える方がいろんな方が進出しやすく、初期投資も少なくて済むという思いで支援している。

部会長

- ・ 既存ストックはバンクというか情報の蓄積があって、そのプールされているものを使っていくような意味合いもあるので、低コストで参入できるような、意味合いを強く出された方がいいのではないかなと思う。既存ストックという表現はわかるが、シンプルに簡潔明瞭にして内容が伝わるということも重要だと思うので、表現を再考していただければ。

委員

- ・ 気づいた意見を出し合えるような地域の中での会合の場をもっと広げていくと、もう少し活性化に対して前向きにやっていけるのではないかなと思う。

部会長

- ・ そのようなサロンの場所として CiC ビルのスケッチラボが機能を期待されている部分もあると思う。いろんなアイデアを持った方が、スケッチラボに自由に入出入りして、いろんな意見を出し合って、ビ

ジネスにつないでくれればと思う。本当に意見交換は重要なことで、誰かが発案すれば、誰かがサポートするとか、違う視点からもっとこうした方がいいのではないかとか、そういうことは本当に必要だと思う。

委員

- ・ 商店街の活性化については、富山市内に人を呼び込む方策が非常に大事だと思う。一つは65歳以上の方に対して、富山市はおでかけ定期券を発行されている。車社会ではあるが、これからカーボンニュートラルによって、車などの動力源は化石燃料から電気に移り変わっていくと思う。やはり若い人も車ではなくて、最寄りの交通機関、特に鉄道で旧富山市内に集まってくることが大切であるが、費用負担等々もあると思うが、そういう面での若い世代への協力と、商店街の活性化を含めて、いろんな対応を検討すべきではないかと思う。中身だけの検討をしても、なかなか人は集まってこないと思う。だからそういう移動手段を含めて、市としての対応策を検討していただけると良いと思う。

事務局

- ・ おでかけ定期券はおっしゃるように65歳以上の方が利用できるもので、富山地方鉄道をはじめ交通事業者のご協力のもとに何とかやっていけるものであり、それをさらに年齢制限を撤廃することはなかなか難しい面もあり、今のおでかけ定期券の枠組みはそのままだとは思っている。

若い方々に対しては、公共交通の利用促進という意識づけとして「モビリティマネジメント」に取り組んでおり、今後も交通担当でしっかり取り組んでいきたいと思っている。あとはやはり、中心市街地の魅力を高めることによって、若い人たちが公共交通を使って来ていただけるようなことをやっていく。行政だけでできることではないので、民間の商業者と連携をしながらやっていければと思う。

部会長

- ・ 富山市ではトランジットモールをやっている。あれは今後もやはり継続していくのか。

事務局

- ・ トランジットモールはヨーロッパでは日常的生活空間の中で車をシャットアウトして電車だけ通れるようにするものであるが、今富山市がやっているのは山王まつりのような歩行者天国みたいになっており、継続するというのはなかなか難しいと思っている。最初は、どちらかという行政がメインになりイベント的にやっていたが、最近は大手モールの商店街の方々や大手モール振興会あるいは越中大手市場実行委員会という民間の方々を中心に実施するようになり、富山市は実行委員会の一員という形になっている。今後はいろんなところから来てお店を出すのではなくて、大手モール商店街の方々が、その日だけはちょっと歩道にお店を出すような中で、市民の方々が自由に歩けるような空間を目指していきたいと思っている。電車以外の公共交通を止めて開催することについては地元の理解を得られる限りは続けていきたいと考えている。

部会長

- ・ そこに若い人たちが、お店をちょっと出してみるとか。仲間がやっているから、みんなで大手市場ま

で見に行こうとか、そういう繋がりも期待できると思うので、ヨーロッパと同じようにするのは難しいかもしれないが、徐々に認知されていっているので、継続してほしいと私自身は考えている。

事務局

- ・ 大手モールの商店街の方はすごく積極的なので、市も協力しながら続けていきたいと思っている。

事務局

- ・ 若い方を中心部に呼び込むということにおいては、まちなかの旧総曲輪小学校跡地に、リハビリ専門学校や調理製菓専門学校、医師会の看護専門学校ができており、おそらく今 600 人ぐらいの生徒さんが勉強しておられる。市民プラザにも、公立の外国語専門学校があったり、富山駅前にも専門学校ができた、CiC の中にも通信制の学校ができたということで、そういった学生が通学だけでなくまちなかに回遊していただくような仕掛けを行政だけでなく、民間の方にも知恵をいただいて、滞在時間を増やすこともやっていく必要があると思っている。

部会長

- ・ 若い方に関連する学校をはじめ、いろんな施設ができてきているので、今後楽しみな部分が多いが、これを賑わいにどのようにつなげていくかという方策を今後考えていくべきではないかと思うので、若い方たちが街の真ん中で、くつろげる、遊べる、楽しめる空間がこれからどんどんできていけば、周辺にも大きな影響を与えてくるのではないかと思う。

委員

- ・ 個人旅行についての意見が反映されていて良かった。SDGs の観点が入っているのも良い。商店街については難しい。公共交通が中途半端で、私が住んでいるところからまちなかに来ることは大変難しい。行きは良いが、帰りはバスの時間が終わってしまっている。最寄り駅が徒歩 25 分だとか。公共交通がもっと充実していればまちなかにも来やすい。一方で、コミュニティバスなど上手く活用できれば良いかもしれない。市民の意識が車にどっぷり浸かってしまっている。とほ活などやっているが、歩かせること自体が課題。いろんな健康づくりも観光も公共交通も中心市街地活性化も関係していることだと考える。それをどう表現するか難しい。

部会長

- ・ 連携の仕組みをしっかりと作るということか。

委員

- ・ イベントや映画など魅力的なものもある。店舗問題もあるが複合的で、15 年前に富山に来た時に比べていい感じになった。一方で、駐車場がすごく増えた。

委員

- ・ おでかけ定期券の件だが、市民病院や市役所のバス停を経由しないと、100 円にならない。

事務局

- ・ もともと中心市街地の活性化ということが目的なので、山田地域とか大山地域から、中心市街地に来てそこで降りていただく場合のみ 100 円になる。もちろん帰りも中心市街地から山田とか大山地域に行けば 100 円だが、その途中の郊外のバス停で降りると正規の運賃になる。

委員

- ・ もう少し利用できる範囲を広げないとただ不評のおでかけバスになるのではないかと私は危惧している。

事務局

- ・ 民間が通常の営業でやっているところを例外的に、市の事業として実施させていただいているのであり、すべてをその対象にするのは富山地方鉄道の経営にも大きく影響するので難しい。なお、市役所、富山駅といったまちなかと、市民病院、赤十字病院で降りた場合はすべて 100 円にはなる。

委員

- ・ 公共交通は北から南へはライトレールがあり、何とか縦の線が繋がっていると思う。問題は魚の骨に例えるが、背骨はできているが、両わき腹の骨が何もない。フィーダーバスなりコミュニティバスなり、徹底的に充実させた方が、今の問題はクリアできると思う。将来何を指すかという計画にするのであれば、今カーボンニュートラルの問題が出ていて、ガソリン車はいつまで使うのだという話がある中で、富山は車の依存度が高く、いずれは電気水素自動車にしないと環境は守られないということを踏まえた上で、莫大な経費と人力がかかるため、今すぐにできると思っていないが、それを目指していく先進富山市であって欲しいという希望を持っている。

部会長

- ・ 目指すべき方向性をもっと明確に打ち出して、それが 5 年後になるか、10 年後なるかわからないが、富山市として交通網を考えているということをもっと明らかにすべきだということかと思う。
- ・ MaaS に関しては、トヨタ自動車提案しているが、富山でも実証実験をやり始めているのか。

事務局

- ・ トヨタグループの品川グループが中心となり民間主体で進めている。

部会長

- ・ 朝日町の「ノッカル」は進んでいるのか。

事務局

- ・ 朝日町は公共交通が弱いところで、町役場が主体的にやっている。どうしても赤字覚悟でやらざるを

得ないというところがあり、その中で市民の生活を支えるため、どこまで町が支援をするかいろいろな方策を検討しているということは聞いている。もともと朝日町バスはコミュニティバスを運行していたが、効率があまり良くないということで、「ノッカル」を始めたと認識している。

部会長

- ・ ユーザーにとっては、目的地を示せば、乗り継ぎとか料金が全部表示される、利用しやすい手段であると思う。これは民間でやっているということで、市民にもそういう情報提供をぜひお願いしたいと思う。

委員

- ・ 富山県にたくさんあった農業高校や高校の農業、園芸の課程がなくなっている。いろんな政策が講じられてはいるが、従事者が高齢化するとともに、外国人の労働者研修生が作業員に従事している状況にある。農業には国土、地域を守る意味もあり、小学校だと昔ながらの田植え、稲刈り体験などを行っているが、中学、高校、大学まで含め、もっと農業の魅力を習う、体験することにより、実際に農業を経営していきたいという気持ちを引き出すために、もう一度富山市の中で、高校に農業科や関連する課程を設置していただけたらどうか。

事務局

- ・ 農業高校や課程が最近なくなっていることは、一つの課題だと思っているが、県立学校のためどこまでできるか難しい面もある。市としては、子供たちに農業の経験をしてもらうことがスタートとして大事ではないかと考えており、多くの学校で総合的な学習等で農業体験をしている。近くに田んぼがなく体験できないという課題もあったので、実態調査をして、できるだけ体験していただくよう今後進めていきたい。

また、昨年度から首都圏の農業高校や水産関係の学校を積極的に訪問し、去年はコロナでオンラインが多かったが、富山に来て農林水産業をやってみませんかというプロモーションを行っている。昨年度は、コロナ禍にもかかわらず、1名がインターシップを経験された。

山田で地域おこし協力隊で活動しておられた2名がリング農家になったり、今年新たに募集したところ1名が決まり、既に働いていたりなど、潜在需要はあると思うので様々な方法を使って富山の農林水産業の従事者数を増やす取り組みを進めていきたい。

委員

- ・ 中山間地では空き家が増えていたり、学校の統廃合で小中学校の廃校になった跡地があったりするので、有効に活用して農業を実践体験できるという取組や、人材の確保も大切だと思うのでご検討をお願いしたい。

部会長

- ・ 楽農学園の受講生はかなり世代が上の方なのか。

事務局

- ・ 受講生の平均年齢は60歳過ぎだったと認識している。定年後受講される方が多い。一般的なコースを終えて専門的な農業者になるためのコースも受講しておられる。
- ・ 新規就農者の研修補助もしているが、1年間に10人前後の実績であり、少しずつではあるが数は増えてきている。

部会長

- ・ 人材育成をしている民間の農業者とタイアップすることもこれからのあり方の1つではないか。
大学でも、近年、就職先として農業への関心を持ってもらえるように導いているが、大学生向けの農業研修、ボランティアが夏休みにあるといいと思っている。昔の学生と考え方も変わってきているので、少し心を動かせば関心を持つ学生もいるのではないか。

事務局

- ・ 先程申し上げた学校訪問の際に、インターシップやゼミ合宿を富山でやってみませんかとアプローチしているが、コロナ禍でどうしても来られないという状況があるので継続的にやっていきたい。
- ・ 今までは農学部からバイオ関係に就職される方が多かったが、徐々に農業に従事する方が増えていくと聞いているので今がチャンスだと認識している。

委員

- ・ 農業所得と一般サラリーマン所得の格差が非常に大きい。労働時間、収入、社会保障関係も含め、もう少し改善すべきところがあるのではないか。農家自身の努力と考え方にはなってくると思うが6次産業化で作った物をいかに売るかということやスマート農業にしていくと投資金額が非常に高くなるということ、さらには今年もそうだが、米の価格が非常に安くなってきていることなどの課題がある。これらは所得以上に経営に対する問題が非常に大きいと思う。そういう面での改善、補助の充実もいろいろご検討をしていただけたらと思う。

事務局

- ・ 資料6ページの上の方にも記載させていただいたが、富山県の農家は9割以上が兼業農家であり、手間がかからない水稲が圧倒的に多いが、収入も少ないということで、水橋地区で612ヘクタールの規模で国費を入れて、農地の大規模化、集積集約化を図ろうとしている。

あわせて、暗渠を入れ、農地を汎用化して、スマート農業にも対応できるようにする。さらには、現在4%しか作っていないニンジン、キャベツなどの高収益作物を47%まで引き上げることで、儲かる農業を構築したい。水橋を儲かる農業のモデル地域として先導し、他の農家へもその影響を波及させ、農業を変えていけないかと考えている。

市も今年度、補助を行っているが、スマート農業は大きな費用を要し、まだ課題はあるので、水橋を参考にして今後どのように農業を展開していくか検討していきたい。

委員

- ・ 砺波の営農者に聞き取りをしていると、後継者がいるところといないところにはっきり分かれていて、後継者がいるところは、割と若い世代の中に地域の環境を守っていききたいという人が育っており、それは年長者の教育や地域ぐるみで取り組もうといった雰囲気などの影響がある。

水橋は儲かる農業をしようということで後継者がいると思うが、中山間地域になってくるとやっぱり地域を守る、営農を継ぐということが不可分になってくると思う。山田を含めて中山間地域において、いかに地域に対して愛着を持ってもらうか、地域を守っていききたいか、他から来てこの地域と一緒にやっっていこうという気になってもらうかが非常に重要だと思う。

地域のリーダーのような人の影響力もあるが、この地域の素晴らしさへの気づきがあると思うし、まちなかに観光客が来てもらってという話があったが、山田地域にも観光資源になるものがあると思うので、まちなかの観光資源に目を向けるだけではなく、中山間地域の森と棚田といった自然が交じり合うだけの景観の素晴らしさ、外側と内側から発見してもらうような仕組みを作り、農業を守っていくような方向性が必要であると思う。

事務局

- ・ 人・農地プランということで、地域の農業従事者の方も入っていただき、自分たちの集落の5年後、10年後はどうか、高齢化して地面が空いてきてこれをどうするのかという将来像を皆さんで話し合ってもらっている。その中で、誰にこの農地を任せるのか、法人に任せるのかなど、地域で議論していただいている。

また、地域おこし協力隊として、外からの新しいパワーとして富山の魅力に気づいていただき、尽力していただいております、非常にありがたい話である。さらに、修学旅行で中学生に農業体験をしてもらう農泊ツアーを山田でできないかということでもう1人募集している。地域のご要望があれば支援をしていきたい。

委員

- ・ とやま市漁協では、若年層が結構入っており、逆に高齢者がいない。収益構造が非常に良く、約15年前から収益が改善し、儲かる漁業として、今はすごく良い状態である。やはり産業人口を支えるのは収益が一番大事である。基本的には富山の場合、米作が主流で園芸農業は比率が低く、手間がかかる割には儲からないということだろうと理解している。

これから農業、漁業を目指す人はライフスタイルに合わせた収益構造、設備投資をしていく必要があり、できれば市や県の協力を得ながら、将来的な事業展開を見据えた補助、助力をいただき、若い人に対し農業の魅力、努力すれば収益性が良くなるというプレゼンをして進めればどうか。富山市の台所を支える意味で大事であり、そういう観点でもう一度計画を見直し、市として助力されればと思う。

部会長

- ・ 時代の流れを読んで対応していくこともやっっていかなければならない。集約化して経費を削減できるようなことも考えていかなければならない。富山は非常に便利なところに地方卸売市場があるので、物流の起点として活用していくことも今後の方向性の一つだと思う。

委員

- ・ ニュースで見たが、海外、県外の観光客への対応として金沢市で点字ブロックにスマートフォンをかざすと、例えば兼六園など名所を三か国語で案内するシステムがある。観光客に対する安心感、面白さを検討いただけたら。

部会長

- ・ また調べていただき情報提供をお願いしたい。
- ・ 前回と違う角度からご意見をいただいたので、事務局で整理し、後期計画につないでいただければと思う。
- ・ 審議の内容は調整部会において報告させていただき、答申案に取りまとめていきたいと考えている。回数は少なかったが、意見としては非常に充実していたのではないかと思う。

以上